

少年と犬

～ Endless World ～

I

原作：カント

AUTHOR KANTO

イラスト：水上 二十歳

ILLUSTRATION mizukami hatati

©

DrawingWriting

少年と犬

～ Endless World ～

I

原作：カント

AUTHOR KANTO

イラスト：水上 二十歳

ILLUSTRATION mizukami hatati



DrawingWriting

少年と犬

～ Endless World ～

I

© DrawingWriting

原作：カント イラスト：水上 二十歳

プロローグ

- 第一話 獣憑き
- 第二話 魔物
- 第三話 暗闘
- 第四話 差金
- 第五話 混迷
- 第六話 開戦
- 第七話 操りし者
- 第八話 必殺剣
- 第九話 追走劇の終幕
- 第十話 本当の獣憑き

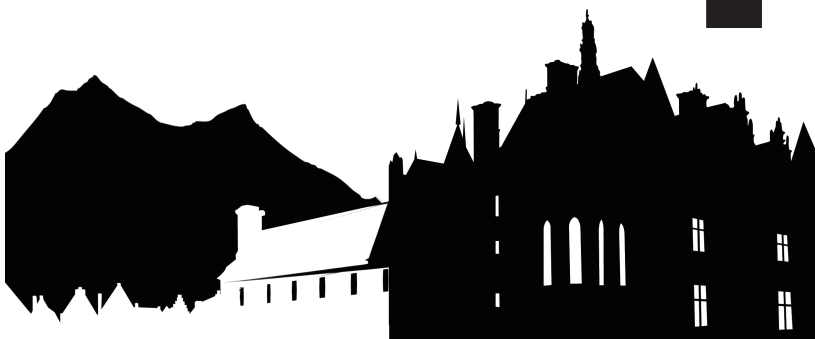
プロローグ

強い風が、頬を容赦なく叩いていく。乾いた風だ。乾ききっていて、そして何より、冷たい風。青年は歩みを止めず、息を吐き出しながら、両手を眼前で擦り合わせた。掌に温もりとして吹きかけられる息は白く、しかしそれもすぐ、強い風に掻き消されていく。

ボロ切れを幾重にも巻き重ねただけのような彼の格好では、にじりよって来る冷気を防ぐには至らない。だから、進んだ。歩んだ。温もりを得るため、ただひたすら。乾いた風の中を、焦げ茶色のひび割れた大地を、見渡す限り続く荒れ果てた荒野を。

空は、酷く汚い灰色をしていた。重く積み重なった細切れの雲が、天一面を覆い隠している。雨は無い。ただ、太陽はずっと顔を出さないままだ。おかげで、目指す地平に見える遠い山々は、いくら歩もうとも、黒い塊のように大地に寝そべっているだけで、その稜線すら朧気だった。

立ち止まり、彼は遠く山々を『視た』。笛の音の如く高い音を奏でる風の中、じんわりと目の奥が熱くなってきた、同時に、頭の中に歯車の噛み合うような音が響き渡る。そして、その数瞬



において、彼は自身の進路が誤りでないという確信を得る。

とにかく、ひたすら、このまま。旅路を『視た』結論は、何度繰り返そうと変わらない。孤独によつてもたらされ、繰り返される不安を、その度にこうして同じ行為を繰り返す自分自身を、彼は小さく笑った。

その時。

何の脈絡もなく、彼は気付いた。

笑みは消え、空を見上げる。灰色の、重苦しい天。だが今、そこには一筋の切れ目が走り、上空から差し込む光が、まるでシルクの布のように大地に垂れ下がっている。

俺を見てるのか、と、青年は天に問いかけた。そして、古い友人の名を呼んだ。

それは、彼がずっと子供の頃。世に蔓延るあらゆる悲劇はフィクションであり、自分がそれらと地続きな存在であるということにすら気付いていなかった、遠い昔。青年は、かつて彼と共に居た——けれど、もう居ない——友の名を呼んだのだ。

「居るんだな、そこに？」

迷いは消え、声には確信の焔が宿った。そして、強く天を見上げたまま、言い放つ。「待ってろ」と。「必ず、お前をそこから連れ戻してやる」

決意は吐き出す息と共に風に吹かれ、遠い空へと吸い込まれていく。だが、青年の眼差しは、そこに灯った輝きは、決して消えず、揺らぐことはなかった。

それから、無数の星が巡った。

第一話「獣憑き」

正体は分からない。だが、確かに何かを感じて、マージ共和国『北の守護』マヒトは、小銭を握ったその手を宙で止めた。

「それで、今年はいつまで街に……どうしたの？」

行きつけのパン屋の売り子が、静止したマヒトを怪訝そうに見つめる。が、彼は何も言わず、手にしていた小銭をカウンターに放り出し、傍の木製の扉を——大通りに面した店の入り口を開け放ち、外に出た。

石畳と煉瓦造りの建造物で構成される大通りには、仕事帰りや買い物途中の人々が、穏やかに行き交っている。時刻は夕暮れ。紅の陽は街一面を一日の終わりの色に染め上げていて、一見すると、彼の育った——そして、久々に帰ってきた——故郷は、ただ静かに、今日という日を締め括ろうとしているように思えた。

だが。

「ちよつとマヒトくん、突然どうし——」

「鐘」

「え？」

追いかけてきた売り子が、背後でキョトンとしている。それには構わず、マヒトは行き交う人々、大通りを挟んだ更に向こうに目を向けた。

遠くに、一筋の黒煙が、夕暮れを引き裂くように立ち上っている。微かに聴こえるのは、緊急事態を告げる鐘の音だ。マヒトは舌打ちをした。久々の故郷で、何かあったらしい。

「店に入つてろ、大人しく——」

振り返って売り子に忠告を放ったその時、背後で、酷く重いものが倒れたような音がした。大理石の像が衝撃に横倒れたような、そんな音だ。

再度、大通りを見る。

「マヒト君」

「トーベ」

呟くように彼は言い、大通りに忽然と現れた彼女もまた、呟くように言った。

紅く、腰まである長い髪に、体全体を覆えるような茶色の——恐らくは男物の——丈夫そうなコート。足には真っ黒な半長靴。スツと立った時の身長は、マヒトより頭一つ分高い。低い鼻の周りに散らばるソバカスの跡と、その上に並ぶ二つの栗色の眼は、マヒトにとってあまりにも見

慣れた、見間違えようの無い旧知の友の姿、そのものだ。

「帰ってきてたんだ。相変わらず小さいね」

「やかましい。それにてめえ、どこから」

返ししながら、マヒトは彼女の足下の石畳が、隕石でも降ったかのようにべこりと崩れているのを見た。周囲の、大通りの人々が、凝り固まったようにトーベを見つめているのを見た。

恐らくは、彼のその視線を追って。

「マヒト君、お願い」

彼女は言った。

「追って来ないで」

「待て、どうし」

告げようとした次の瞬間、冬の大きに肉を千切るような音が響いた。トーベが深く屈む。マヒトは見た。彼女の右腕が、コートの中が、激しく、脈打つように蠢いたところを。

全ては一瞬だった。

体の命じるままに、マヒトはすぐ後ろの売り子の体を捕まえ、地面に突っ伏した。トーベは右腕で強く宙を薙ぎ、それによつて巻き起こった陣風と粉塵の中、石の碎ける音が幾重にも響く。

悲鳴が聞こえた。重いものが崩れる音も。大地が激しく揺れ、細かく鋭い砂塵が、伏せた体を激しく叩いてくる。

「トーベ！」

腹這い状態で顔を上げて、吹き荒ぶ暴風と粉塵のせいで、旧知の友の姿をまともに捉えることは叶わない。だが、陽炎のように淡く映るシルエットの中で、二つの眼だけが異様な程に強く、爛々と、北極星のように光り輝いているのを、マヒトは見逃さなかった。

その色は、先ほどまでの栗色ではない。全てを凍てつかせるような、冷たい青だ。

また、肉を千切るような音が響いた。粉塵の中のシルエット、その一部が、悶えるように蠢き、肥大化していく。

「てめえ、まさか」

暴風の中、マヒトは呆然と呟いた。

『『獣憑き』に』

「追ってこないで」

もう一度シルエットと化した彼女は言った。そしてその直後、相手は肥大化した自身の『何か』を、思い切り大地に叩きつけた。

ドン、と、突き上げられたかのような衝撃が大通りを貫き、無数の石塊が大気に巻き上がる。粉塵は煙幕のように視界を遮り、突風がマヒトの体を羽交い絞めにした。方々で悲鳴が上がり、隣の売り子が彼の名を呼ぶ。マヒトは動けなかった。地に伏せたまま。

やがて。

「トーベ」

粉塵と暴風が収まった後、彼は目にする。大通りの石畳に刻み付けられた地割れのような巨大なひび割れと、崩壊して崩れ落ちた家々、そして倒れ込み、座り込む人々の姿を。弱々しく響く呻き声の中、紅色の夕陽が、ルビーよりも美しく輝いていた。

『十月二十日

最後にペンを走らせてから、随分と間が空いちまった。まだ完全に落ち着いたとも言えねえが、こうして手帳に向き合えるだけの余裕は出てきている。だから、ここに書き残そう。この日からこのことを。

先日予想してた通り、一日の大半はやはり馬車の中だった。首都に戻ってきたのは夕方だ。腹が減ってたから、部下には荷物を部屋に届けるように言って、俺はいつもの、行き着けのパン屋の前で馬車を降りた。

問題はそこからだ。店先に突然、トーベが現れた。恐らくは国立研究所から、街の真ん中を横切る河を跳んで渡ってきたんだろう。距離にすりゃ、百メートル以上か。もうこの時点でかなり無茶苦茶な身体能力だが、後のことを考えれば、まだまだ可愛いもんだった。

砂の山を崩すみたいに、アイツは大通りやそれに面した家々、おまけに行き着けのパン屋を壊し、消えた。後で聞いた話だと、軽業師みたいな身のこなしで家々の屋根の上を走り、西へ逃げたっていったそう。

本音を言えば、俺は直ぐ様アイツを追いたかった。だが、パン屋の旦那が崩れた店の下敷きになつていたし、売り子が雛鳥みてえにワアワア泣き喚くもんだから、俺は旦那の救出を優先せざるを得なかった。

そうして、旦那を助け出して——幸運なことに、瓦礫と瓦礫の間に出来上がった空間にすっぱり収まつて、旦那に大した怪我は無かつた——さてトーベを追おうと走りかけたら、今度は中央守護塔に向かつてる途中のフィデスと鉢合わせした。そして、ヤツは強引に、俺を自分の馬車に押し込んだんだ——」

「既に聞き及んでいると思いますが、今回の騒動、およびそれに伴うこの緊急招集は、中央ブロックで確認された『猓憑き』罹患者についてのものです」

マージ共和国『南の守護』・フィデスは、集まつた守護たちを見回し、厳肅に言い放つた。真つ黒な長い髪を後ろで括り、白いゆつたりとしたチュニツクに身を包む彼女の、その鷹のように鋭い視線に呼応するように、『西の守護』・ドルジバが、緊張した面持ちで続ける。

「先に被害から。国立研究所の職員十余名が軽症、二名が重症。中央ブロックの市民二十二名が軽症、そして罹患者を取り押さえようとした守護隊員五名が重症です。皆さん、幸いにも命に別状は無いようですが」

「何だ、そんなもんか。街中で『猓憑き』なんざ、死人で聖歌隊が組めるかと思つとつたが」

『東の守護』・アンスタンが、外見通りの低く、よく通る声で感想を漏らす。彼は守護隊のピツチリした黒いシャツをただけ、暑い胸板、毛むくじやらの二の腕を、これでもかと言わんばかりに冬の大気に見せつけている。一方、ドルジバはというと、シャツの上にコートを着込み、華奢な体軀をすっぽりと防寒具の内に引っ込めていて、四人掛けの四角いテーブルで向かい合つて座る彼らの姿は、滑稽な程に対照的だ。

「俺がガキの頃に見た『猓憑き』はな、そらあひどかつたぞ。犠牲者の血で河が赤く染まつておつた」

「今は昔話をしていられる事態では無いわ、アンスタン」

「わあっとる、要は——」

「『被害が少なくて良かったな』ってことだろ」

ポケットに手をつつまみ、両足を投げ出すように伸ばして椅子に座るマヒトが言い放つと、アンスタンはヒゲだらけの顔に満面の笑みを浮かべた。四角い顔にボサボサの長髪、丸い鼻と、見ているだけで暑苦しい彼は、「マヒト坊の言う通りだ」と大きく笑う。

「おまけに、罹患者はもう街の外に出たのだろう？　ならば、マージ首都の住民に危険は無いわけだ」

「まさか」

「ええ、逆ね。罹患者の所在が掴めていない、故に危険だと考えるべき。アンスタン、あなた『獣憑き』についてはどの程度ご存知？」

「馬鹿にしてみたらって困る」

アンスタンは腕組みをして、憤然と言った。一種の精神の病だろう、と。

「狂犬病に似た凶暴性と、尋常ならざる身体能力を得る代わりに、自我らしきものが消えると聞く。その様はまさに、獣に取り憑かれたようだと」

アンスタンの言葉を耳にしながら、マヒトは数時間前のトーベの姿を頭に浮かべていた。爛々と輝く、二つの真っ青な瞳。そして風の中で蠢きながら肥大化していた『何か』。

「凶暴性、という言葉に収まるものではないわ。記録によると、過去の罹患者は皆、症状の進行と共に、好んで人を殺し始めたと聞きます。そして、殺せるだけ殺して、最後には自害する」

「凶悪の一言に尽きる病ですよ。だからこそ、我々の早急な措置が必要となるわけで」

「分かった、分かった！　俺が悪かった、甘かった！　これで良いか？」

ムスツと、子供のように口をへの字に曲げるアンスタんに、フィデスが静かに溜め息をつく。ドルジバは困ったようにアンスタンとフィデスの間で視線を右往左往させていて、マヒトは会議の行く末に頭が重くなった。

東西南北の名を冠する『守護』は、このマージ共和国における軍事最高責任者のことを指す。マヒトが就く『北の守護』はその中でも最高の地位にあたるのだが、一年の殆どを重要拠点である北方の要塞都市で過ごしていること、そして彼自身がこの中で最も若いということから、こうして守護同士が顔を突き合わせる場では、まだどうにも統率しきれていない部分がある。

「とにかく、やることは一つだ。罹患者の後を追うぞ」

頭を切り替え、マヒトは立ち上がった。獣憑きへの措置。それは、ここで幾ら会話を重ねても変わらない。マージ共和国には、その長い歴史の中で決定付けられた、揺らぐことの無い唯一の対処法が存在する。

即ち。

「で、殺す。被害が増える前に」

うむ、とアンスタンが唸った。脳裏には旧知の友の姿が生々しく浮かんでいる。だが、それを斬り捨てようとするが如く、マヒトは告げた。俺が行く、と。

「噂に違わず、相手は化け物じみた身体能力を持つてゐる。下手な奴を追走させたら、それこそ死人の聖歌隊が完成しちまうからな」

「ダメよ」

ピシヤリと、はね除けるようにフィデスが言った。視線を向けると、彼女は真つ黒な瞳に硬い意思を漲らせている。

「何故だ？ マヒト坊はここに居る者はおろか、この国一番の使い手だぞ。魔物すら斬り捨てた実績もある。『必殺剣』によつてな。これ以上の適任者はおるまい」

「だからこそ、です。万が一にも北の守護が敗北してみなさい。兵や国民に与える影響が、一体どれほどになるか」

告げられた言葉を、マヒトは思わず鼻で笑った。チラリと灰色の壁に掛かった時計を見ると、事件発生から既に三時間が経過している。グズグズしている余裕は無い。

「下らねえ。事態は一刻を争うんだ、行かせてもらうぞ」

「下らなくありません。我々がこの国の軍事権を担う者である以上、もつと戦略的に事態に取り組んでもらわなければ困ります」

「戦略的？ 笑わせてくれるなオイ。そうやって中途半端なことをしたから、今回の事態に繋

がつてんだろ？」

狭い会議室の壁にもたれ掛かり、挑発するように笑つてやると、フィデスは舌打ちをしてドルジバを睨んだ。喋ったわね、と不機嫌そうに言う彼女に、ドルジバは慌てた様子で立ち上がり、首をぶんぶんと横に振る。

「何も言つてませんよ、私は！」

「言われなくても分からあ。犠牲者の少なさ、自らし街地から消えた罹患者、過去の罹患者に対する措置内容。ひつくるめて考えりゃあ答えはすぐに出る。」

大方、てめえかドルジバのオッサンのどつちかで、罹患者のもとに兵を向けたんだろ？ 獣憑きの場合、症状を自覚し始めた者が取る行動は、医者にかかるか国立図書館で獣憑きについて調べ始めるかどつちかだからな。疑わしき者の噂なんざ、俺らの立場だとすぐに耳に入る。だから、てめえらはセオリー通りに兵を向けた。それはいいさ。

問題は三つだ。罹患者がまだ周囲に注意出来るだけの自我を持つてゐる——要するに症状の初期段階にいるにもかかわらず、五人がかりで負けた兵の弱卒っぷり。その未熟さを考慮出来てねえてめえらの樂觀的思考。最後に、俺に話を通さずに事に取り掛かったてめえらの営めっぷり。異論は？」

「勘違いしないで欲しいのだけれど、軍事決定権はあなた一人にあるものではありません。そして、裁量権は南の守護たる私に重きがある」

「で、その結果は早期決着どころか怪我人の山ときた。素晴らしい裁量でございますなあ、フィデス姐さん」

「その言い方は喧嘩を売っているのかしら」

「おう安心したぜ、皮肉が通じねえ程の馬鹿じゃあないらしい」

「やめんかお主ら！ みつともない！」

派手な音を立てて立ち上がるフィデスに、アンスタンが痺れを切らしたように怒鳴った。冷えた会議室の空気はびりびりと震え、中央の木製の机が共鳴するかのようによろめく。

「過ぎたことは良い。問題は次にどうするか、だ。そして、何度も言うが、俺はマヒト坊が適任者だと思っ」

こやつが一人で不安だというなら、俺もついていく。そうすればフィデス、お主の心配も無用だろう」

思い通りに事が運び、マヒトは胸の内で密かにほくそえんだ。アンスタンはこの中で一番の年長者であり、守護としての経歴も長い。彼の発言は、この場では最も効力がある。ウマの合わないフィデスと話し合うよりは、よっぽど早く決着がつくだろう。

「四人の軍事最高責任者から二人も人を割けと？」

「大は小を兼ねる。殊に戦いにおいて、出し惜しみは敗北の源だ」

「賛同しかねるわ。私達に委ねられているのは、この件だけではないのよ」

「私も反対です」

不意に、ドルジバが口を挟んだ。どちらかと言うとあまり主張しないタイプの彼が放った言葉に、マヒトを含めた皆の視線が集中する。

「特に、マヒト君。君はここに留まっているべきだと思う」

「ヘエ。その心は？」

「今回の罹患者は国立研究所のトーベという職員だ。……君の幼馴染みだろうか？」

ドルジバは、真っ直ぐにマヒトを見据えていた。その茶色い瞳に宿った光の強さは、フィデスに勝るとも劣らない。

彼は言った。例え君が適任者でも。

「他の者にさせるべきだ。……古い友人を職務で手にかけるなど、人に科して良い責務じゃあない」
ああ成程、とマヒトは胸中で呟いた。理解し、得心したのだ。トーベに兵を差し向けたのは少なくとも、その日取りを決めたのは——きつとドルジバなのだろう。

きつと彼は、マヒトが帰ってくる前に片をつけるつもりだったのだ。マヒトが『人に科すべきでない責務』を背負わなくても良いように。それが、マヒトが予定を繰り上げて早く帰ってきたものだから、計算が狂った。概ねそんなところだろう。

随分と見くびられたな、とマヒトは笑った。

「心配」ご無用だ。必要なら、親でもガキでも殺してやる」

「息巻いているところ悪いけれど、そんな話を聞いた以上、尚更あなたに任せる訳にはいかないわね」

「ああ？」

「いざとなったら情が出て殺せない。そんな可能性がある人間の、何を信用し」

会議室に、鋭い風斬り音が走った。フィデスは放っていた言葉を止め、自身の首元に突きつけられた、銀色の刃を見つめる。

「何を信用して任せるというの」か？ ……随分な口を叩いてくれるな、てめえ」

マヒトは深く息を吐いた。そして、突き出した剣をそのままに、風いだ水面のような穏やかさで言い放つ。試してみるか、と。

「情が出て殺せねえかどうか。てめえの身で、だ」

「それはつまり、あなたの中では、親や子に並ぶ情を私に抱いているということ？」

「戦友はみんなそうさ。当然だろ」

「あら嬉しい、光栄ね」

フィデスは意にも介さぬ調子でそう言うと、一人嘆息を漏らした。そして続ける。分かりました、と。

「あなたに、追走の任に就いてもらいましょう」

「何だ、イヤに物分かりが」

「但し」

フィデスは自身に突きつけられた切っ先を片手でつまみ、退かせながら、はね除けるように言っ

た。
「やはり一人で行かせる訳にはいきませんし、だからと言って他の守護をつける訳にもいきません」

「ならどうする？」

「各守護から一人ずつ人を出しましょう。そして、あなたを含めた計四人で追走隊を組む」

これが最大の譲歩です、と彼女は言った。マヒトはその様子を暫く眺めてから、静かに剣を鞘に納める。

「了承したと取ります。では、早速手配しましょう」

抑揚の無い口調に、マヒトはじつとフィデスを見つめる。が、こちらの探るような視線など何処吹く風で、相手は硬い靴と床で乾いた足音を作り上げながら、さつさと会議室を出ていってしまっ

た。こうして、狭い会議室に三人の男が残る。

「マヒト坊。今のは感心せんな」

アンスタンが苦言を呈する。突きつけた剣のことだろう。本気じゃねえよ、と気の無い返事を

しながら、しかしマヒトは別のことを考えていた。即ち。

「企む？」

ドルジバが怪訝そうに尋ねる。それには答えず、マヒトは尚も、開け放されたままのドアを見つめた。確かに、剣を突きつけたのは結論を急がせるためだ。

だが、それにしても。

「とにかく、腕の立つ者を君に預ければいいんだね？」

無言のマヒトを見かねてか、ドルジバが再度尋ねてきた。ああ、と、頭を切り換えて返すと、彼は小さく溜息をついて、やがて「誰に任せるべきかなあ」などと言いながら会議室を出て行った。

「……さて、では俺も部下を探すか。俺が行けば話は早いのだがな」

「仕方ねえさ。フィデスの言うことも一理ある。……だが」

「だが？」

アンスタンの言葉に、マヒトはしばらく何も返さなかった。頭の中では何度も、夕暮れのトーベの姿と、先ほどのフィデスの言動がフラッシュバックしている。彼は考えていた。そして。

「アンスタンのオッサン。一つ、頼まれてほしいことがある」

「なんだ？」

「調べ物をして欲しい」

壁にかかった時計を見つめながら、彼は静かにそう告げた。